

オープン・フォーラム：多文化関係学の可能性を考える

司会	灘光洋子（成蹊大学）
ファシリテーター	手塚千鶴子（慶応義塾大学）
話題提供者	渡辺文夫（上智大学）
	小松照幸（名古屋学院大学）
	石黒武人（明海大学）
	千葉美千子（北海道大学大学院）

趣旨

多文化関係学会が発足して6年目を迎えている。その間、色々な試みがなされ、同時に、様々な疑問や質問を耳にしてきた。文化性、関係性、超領域性を柱とする「多文化関係学」とはいったい何を目指しているのか、本学会と他の関連学会との差別化（線引き）をどこに求めることができるのか等、苛立ちともとれる声に対し、我々はどのように向き合おうとしているのか。この新しい学問の可能性について改めて考える時がきているのではないだろうか。こうした声に真摯に応えるべく、オープン・フォーラムでは、話題提供者とフロアーとの間で積極的に意見を交換し、多様な知をすりあわせ「多文化関係学」についてじっくり考える機会としたい。

話題提供者として、学会発足時からの会員である渡辺文夫氏、小松照幸氏、若手会員の石黒武人氏、千葉美千子氏を迎え、それぞれのご意見を展開していただく。この1時間の後、後半1時間は、フロアーの皆様との自由な議論の場にしていきたく、皆様の参加を心よりお待ちしております。

話題提供者よりみなさまへのひとこと

渡辺文夫（上智大学）

「文化」という言葉を用いて研究する場合の問題点をさまざまな角度から皆さんと議論できたらうれしいです。たとえば、「文化」という言葉の持つ隠蔽性です。現実には、人種、民族、政治、経済、社会、人権問題なのに「文化」という言葉を用いることによって、その生々しい人間の現実が、隠蔽されてしまうことです。歴史的に見て、米国を中心に学問領域で「文化」という用語を使ってさまざまな研究がなされてきた背景には、このような生々しさと政治問題化を回避、隠蔽しなければならないほどに、人種、政治、人権問題などがすさまじいものであることがあるように考えています。

小松照幸（名古屋学院大学）

多文化の関係性を包括的に捉えるには、1 自己理解、2 他者理解、3 自文化（日本）理解、4 他/異文化理解と言う4視点が重要です。現代日本の「社会システム」（マクロ文化）と「日常生活文化」（ミクロ文化）のあり様と関係性を学際的に分析し、21世紀の社会を経済・環境・文化のバランスから考える事が、本学会の次世代への責務と思っています。多文化共生の現実、生易しくはなく、狭い分野に捉われず、マクロの問題には政治、経済、法律的視点と、ミクロの問題には社会心理、宗教、病理等の視点による「学際的協働作業」が不可欠だと思います。人間存在の核である「心は、文化に関与し形成され、同時に、文化は心により維持・変容される」と、その負の究極では「戦争は人の心から始まる」と言われています。そこで本学会の現実への切り口には、心の光と闇に目配りしつつ、マクロ文化とミクロ文化との関係性を明らかにすることが重要ではないかと考えます。

石黒武人（明海大学）

私は、多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーションについて研究しています。今回、話題提供者として、多文化関係学（会）の今後の方向性ならびに他学会との差別化に関わる2つの点についてお話しします。まず、「学とは何か」という根本的な問いを起点にして、多文化関係学のあり方・方向性について私が抱く見解、疑問を率直に提示いたします。次に、「多文化関係」という表現が示唆する「3つ以上の文化の関わり」をテーマとする研究を優先的に取り上げていく学会の立場についてお話しします。この立場をとることによって、多文化関係学会が他学会との差別化を実現する可能性について論じます。

千葉美千子（北海道大学大学院）

「ホロコースト研究におけるロマ民族の位置づけ」、特に、「犠牲者間の格差」という問題に取り組む私の研究と多文化関係学の接点は、「関係性」にあります。歴史の主流で描かれることのなかったテーマを探るには、先行研究が、利害関係者の如何なる政治的思惑、文化的配慮と共に形成されてきたかを踏まえ、それらの「関係性」を有機的に結合させる新たな研究方法と視座の確立が必要と感じたからです。多文化関係学を学として確立するには、実証研究を理論的枠組みとどう関連させるかという課題があります。また、複数の研究領域が複層的に交錯する空間概念(sphere)を創出することで、文化の多様性をより柔軟に表現できるのではないのでしょうか。当日は、個々の研究領域を「関係性」という<糸>で結ぶ多文化関係学の可能性についてお話したいと考えています。